

こども食堂における空間デザインの研究

A2201618 中曽根 椿

研究の背景

現代の日本では、相対的な貧困状態にあるこどもが年々増加し続けており、他の要因とも相まってこどもたちの孤食という問題に発展している。これを危惧した市民の有志が始めたこども食堂は、現在も全国各地で広がりを見せている。これらのこども食堂の多くは、NPO 法人や一般社団法人などの法人団体と、地域の人々の有志による任意団体が主となって活動している。利益を重視した活動ではないため、資金などの問題から専用のスペースを持ち活動している食堂はほとんどない。活動規模はその地域により大小様々だが、その多くは地域のため、こどもたちのためとなることを目的として発足されている。

本研究では、こどもたちの孤食から起こっていると考えられる、これら「こども食堂」について、こどもたちがより楽しく食事をし、地域と関わっていける場所づくりを提案する。

研究の目的

「こどもたちの孤食」を解決する方法として、現在「こども食堂」が全国的に試行されている。まず私は「こども食堂ネットワーク」というこども食堂の情報をまとめたサイトから、活動場所、運営形態などを調査した。次に、より詳しいこども食堂の現状を知るため、郵送、WEB でのアンケートを実施し、活動内容や活動している場所について調査した。その結果、半数以上のこども食堂は食事を提供する以外に、こどもたちと遊ぶ時間や学習支援を行っていることが分かった。また、ほとんどのこども食堂は、間借りした施設で活動しており、空き家などの市のタスクを利用しているものは数件しかなかった。

以上より、こども食堂を運営しやすいユニットを製作し、空き家を活用したこども食堂に最適なインテリアの配置やデザイン等について研究することを目的とする。

研究のプロセス



<アンケート結果のまとめ>

全国のこども食堂を対象に、郵送・Web で合計 119 箇所アンケートを送付し、40 箇所から回答を得た。

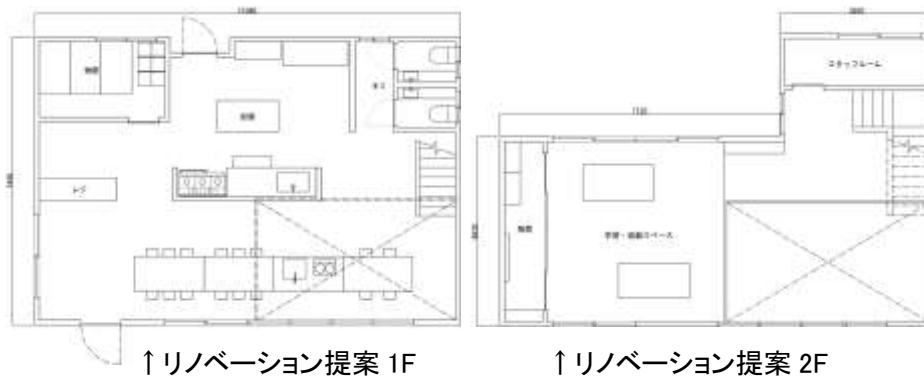
○アンケートから得たこと

- ・こどもたちと遊ぶ時間や学習支援を行うための空間が必要→居室を転用させる必要性
- ・調理をこどもたちで行う施設では、調理スペースの広さや収納の少なさに不満を感じている場所も多かった→調理スペース、作業スペースの確保
- ・利用する年齢層で最も多いのは「小学校低学年(1~3年生)」で、次点は「小学校高学年(4~6年生)」
→家具の寸法は小学校3~4年生の平均身長を参考
- ・地域の多世代交流の場ができた→設置する家具には大人とこどもの両パターンが必要

完成作品

・リノベーション

宇都宮市で管理運営されている、空き家を改装して利用されているコミュニティカフェ「SONOTSUGI」を場所として設定し、新たなリノベーション提案を行う。日替わりでそれぞれの団体が利用する



ため、子ども食堂以外の利用方法があることを前提条件とした。

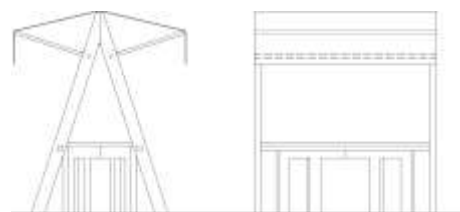
また、郵送・Webでのアンケート調査の結果、施設に工夫を施している子ども食堂も多くあったため、それらも参考にリノベーションの提案を行った。

・子ども食堂ユニット



軽トラックに載せて運ぶことができる、子ども食堂のユニットを作製した。多くの子ども食堂は場所を間借りして行われているため、移動可能なユニットを考察した。

ユニットの内容は、シンク・コンロの設置できるキッチン、子ども用の作業台、子ども用のダイニングテーブル、食器棚、おもちゃ箱だ。小学校3～4年生の平均身長から、作業台の適切な高さは70cm程度であることが分かった。



↑テント図面

これは、市販されているダイニングテーブルの高さと一致する。よって、子どもたちの作業台と大人用のダイニングテーブルを兼用させることで、持ち運ぶ量を少なくした。テーブル・ツールは組み立て式にして、分解して運ぶことができるようにデザインした。

考察

子どもたちの相対的貧困という問題は、私の想像以上に世間から重要な問題としてつくられていた。多くの子ども食堂は地域の新たなコミュニティを形成し、子どもたちが孤立しない環境をつくろうと努力している。それは、子どもたちの現状に不安を感じ、問題を解決しようとする意識を持っている人が多いことを示している。

私は研究を通じて、子どもたちの成長に大切なものはコミュニケーションであると感じた。地域内での多世代交流をつくることで、子どもたちは自らの世界を広げることができる。そして、他人を認め、認められることの大切さや、自分とは異なる価値観を持った人たちとの関わり方を知ることができる。今回取り組んだ提案は、子どもたちがより楽しく食事を行い、地域と関わっていくことができる施設・ユニットのデザイン提案であるが、子ども食堂が食事だけでなく、地域がつながる場所も提供しているということを深く実感することができた。こういったコミュニティ形成のきっかけとなる場所は、今後「子どもたちの孤食」という問題が解決したあとでも、必要であるのではないかと考える。